

2010年
6月9日
水曜日

井上琢智 教授（経済学史）

Perfectability's 「光」と「影」

これまで、この「経済と人間」シリーズでは、「経済人は男性か女性か」「経済学は自然をどうとらえたか？」など、経済学が前提にできた論点を取りあげてきました。今日は、経済学がときには前提としている人間の「自己完成可能性」について考えてみたいと思います。

ところで、関西学院の校章である「クレセント」もこの問題を扱っています。それによると、新月は「月が太陽の光を受けて自らを輝かせるように、われわれは神の輝きを常に受けて自らを輝かせ続ける者であるとの自覚と、新月がやがて満月へと完全を目指して輝ける存在であるように、ひたすら理想を憧れ求めて、進歩向上していくことを象徴するもの」とされています。

「人間は完全な存在になりうるか」という問題は、旧約創世記11章

の「ハベルの塔」の話を持ち出すまでもなく、古くから人を悩ませてきた問題です。例えば、心と身体を区別したプラトンは、人間が完全な存在になるためには、肉体の制御と理性による心の制御が必要であると考えましたし、キリスト教では、原罪を犯してしまった人間は、神の恩寵による以外に、人間の完全化は不可能であると教えました。

しかし、近代以降は、理性が重視されることで、神や宗教がしだいに後退し、逆に世俗的道德の完成と教育の重要性が強調されるようになりました。例えば、ロックは白紙状態で生まれる人間は教育により知的・道德的完成が達成可能と考えました。ルソーは人間の完成能力が人間を自然状態から文明状態に移行させる一方、人間の不幸、知識と誤謬、悪徳と美德の源泉であると考え、こ

の完全可能性の「光」と「影」を明らかにしました。

この点で近代の産物の一つである経済学は、人間は「極大・極小原理」を完全に実現できる「経済人」を前提に構築されています。もともと、経済学者・思想家、さらには文学者の中には、この「仮説」の妥当性について疑義をはさみ、今なお議論が続けられています。ただ、重要なことは、このような「仮説」には当然のことながら「画一性」が含まれているということです。この画一性のもつ問題点を明らかにした一人にフンボルト(K. W. von Humboldt, 1767-1835)がいます。彼はドイツの人文主義者でベルリン大学の生みの親であり、イギリスのユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの設立に大きな影響を与えましたが、「重大な指導原理は、人類が能う限り多種

多様な発展を遂げることが絶対的に根本的に必要である」とし、「自己完成可能」実現に至る「多種多様な発展」を主張しました。この文言をその著『自由論』の冒頭に掲げたJ・S・ミルは、この「多種多様な発展」を実現する手段として、人間の「個性と自由」を強調しました。この考えは、今日まさに人間がしばしば「人材」・「人的資本」と呼ばれ、人間に画一性が求められているという事実とは対極にあることとなります。本来「人間の学」であるはずの経済学は、もう一度、人間とは何か、経済人とは何かを再考する必要があるのではないのでしょうか。